

# 青春の道標

中嶋嶺雄

実家倒産で突然の逆境

私が生まれ育ったのは、信州松本の街中である。今は「蔵のある町」として旧城下町の観光スポットにもなっている市の中心、中町二丁目の商家（薬局）であった。一〇数代も続く中嶋家のいわゆる本家でもあり、元来は松本藩の御用鍛冶（大名の刀工）で、今でも祖先が造った日本刀と「御用」と書かれた看板が残っている。

母方の祖先は松本藩士であったが、同じ街中の商家（時計屋）になっていた。家の裏には市中を二分する女鳥羽（めとば）川が流れ、東には美ヶ原高原が山並みを成し、西には北アルプスの嶺々がそびえていた。

松本は、私の両親もそこに学んだ、日本最古の小学校として知られる開智学校に象徴されるように、教育熱心で文化的な香りの高い都市であった。そのような環境で

手広く営業していた薬局の一人息子だった私は、何不自由なく幼少期を過ごしていたといえよう。

三年間通った市立松本幼稚園、美ヶ原から流れる薄（すすき）川の畔の源池国民学校（三年生で終戦となり、小学校になった）、新制の市立清水中学校と育ってきたのだが、いずれもよい教師に恵まれ、いつもクラスを代表する存在としての場も与えられていた。

松本市は戦災を免れたが、戦争末期には市内から安曇野の田舎（梓川村）に疎開し、玉音放送はそこで聴いた。子供心にとても悲しくなり、声を出して泣いたことを覚えていいる。私たちは典型的な「墨塗り世代」（教科書のそれまでの戦争を鼓吹していた部分を教室で墨で塗りつぶして使用した世代）で、こうして幼少期に価値の大転換にさらされたのであった。

とはいえ、個人的にはバイオリンを習ったり、絵画が

県展に連続入選したり、陸上競技では中学生の県記録を作ったりと恵まれた幼少期を過ごしていた私が、もう学校にも行けなくなるかと思われた不幸に突如襲われ、辛い逆境に陥ったのは、希望に満ちて入学した松本深志高校の一年生のときであった。今日風にいえば、我が家が倒産したのである。

〔日本経済新聞〕二〇〇四年八月七日

## 二、良い教育者と出会う

松本で育った私が今振り返ってみてつくづく感じるこの一つは、幼稚園から高校まで、本当によい教師、よい教育者に出会ったことであった。のちに自ら大学の教壇に立ち、また永く大学行政を担うようになってからは、東京の大学人に比べたら、信濃教育会傘下の信州の教員の方が、はるかに立派な教育者ではないかという思いを一層強くした。ところが近ごろは、「教育の信州」がかなり地盤沈下しているようで、残念でならない。

私の幼少期を振り返ると、二二〇年近い歴史をもつ市立松本幼稚園の園長は、郷土史学者としても著名な一志茂樹先生だった。当時一番お若かった担任の杉浦眞美先生は今もご健在だが、寒い冬の日に私たち園児をコートのかなかに包んでくれたぬくもりが忘れられない。

今年が創立一〇〇周年の源地国民学校（小学校）は、

町の外れの薄川の畔にあったので、学区で一番遠くから通った。近くサイトウキネンのオペラのために、こけら落としをする巨大な市民芸術館の場所は深志公園といって、よく野球をやった広場や庭園風の池があったが、そのあたりを通過して行った。教育勅語が納められていた奉安殿に一礼して学校に入る緊張感が懐かしい。

三年生で終戦となり、復員して来られた四年生のとき、金井庄平先生は、「民主日本」の建設に情熱を注がれたが、ある事情で教頭の舛良次先生が担任になった。薄川で鉱物採集の石を拾ったり、美ヶ原で高山植物の標本を作ったりと、野外教室が素晴らしかった。

そんなある日、小学校の校庭をジープが勢よく横切つて視察に来た。米進駐軍の教育担当将校で確か名前はウイリアム・ケリーといったが、生徒との懇談があってアメリカの小学校について私が質問すると、通訳を介して丁寧に説明してくれた。だが、彼は教卓に腰掛けたまま、軍靴を生徒の机の上に投げ出して答えていたのである。その姿に、「日本は戦争に負けたのだ」と強く思ったことを覚えている。

〔日本経済新聞〕二〇〇四年八月一日

## 三、上高地描き山のとりこに

戦後、義務教育の場としての新制中学校がスタートし

た。三年目に入学した松本市立清水中学校は、私にとって  
思う存分に少年期の青春を燃やした場所であった。

一年生の担任は慶応の仏文で豊島與志雄の教えを受けたという  
国語の土谷繁富先生で、『校報』や生徒会誌『窓』の編集委員として薫陶された。卒業までの二年間は、  
文部省教科書『民主主義』（上下）をテキストにした社会科の  
嶋田正次先生が担任で、徹底した生徒会活動を指導してくだされ、  
クリスチャンとしては「心の奥の奥のそのまた奥の良心」をいつも説いていた。

当時の松本市には市立の新制中学校が五校あり、スポーツでは  
浅間温泉に近い県営競技場での五校競技会、音楽では松商学園講堂  
での五校音楽会が毎年催されて、全市の中学生にとって一大イ  
ベントであった。クラブ活動はこの二つの行事と生徒会主催の秋  
の文化祭に集中していた。

五校音楽会では私が女子コーラスの指揮者に選ばれた  
り、パッハの「二つのバイオリンのための協奏曲」を同窓生と合奏  
したり、また「終戦直後」と題した私のクラスの仮装行列が人気  
だった文化祭を取り仕切ったりと、これらの行事のいわば主役  
となった。

特に私が短距離選手権兼キャプテンを務めた陸上競技は、  
清水中学が圧倒的に強く、県の総合体育会でも四〇メートルリ  
レーなどに優勝した。毎日暗くなるまで練習したが、そんな  
ある日の夕刻、女鳥羽川畔の市役所前

まで来ると、新聞の「号外」が鳴り物入りで配られていて、  
朝鮮動乱のぼっ発を知らされた。

子供のころから絵も得意で、山岳画家の古市幸利先生や水彩  
画家の白山卓吉先生に習って、中信美術展や長野県展に入選  
したのも中学生のころだった。三年生のときに、晩秋の上高  
地へ独りで行ってイーゼルを立てて穂高連峰を描いていると、  
『信濃毎日新聞』の記者が写真入りで記事にしてくれた。  
山に魅せられ、高校、大学と山岳部に籍を置くようになった  
原点はこのときであった。

（『日本経済新聞』二〇〇四年八月二一日）

#### 四、多くの文化人が松本に

松本が文化の香り高い都市だったというのは、町の文化人の  
尽力で松本音楽院が終戦の翌年に設立されたり、旧制松本高  
校があったりしたことなどだけではない。

戦時中の疎開ということもあったが、著名な文化人が大勢  
松本周辺に来ていた。薄川上流の温泉・霞山荘には陶芸家  
のバーナード・リーチがよく来ていたし、浅間温泉には洋  
画界の重鎮・石井柏亭が逗留（とうりゅう）していた。石井  
画伯の寄宿先「せんきの湯」は一般の湯客はとらなかつた  
が、わが家はよく使わせてもらったので、立派なひげをたく  
わえた柏亭先生とは子供のころから湯船でよくご一緒した。

恐れ多くて話はできなかつたが、中学一年のとき中信美術展に初入選した「夜の書棚」と題する二〇号の水彩画を展覧会場で褒めていただいた喜びは忘れがたい。柏亭先生のお嬢様の画家・田坂ゆたかさんとは今も時々お会いしている。北アルプス山ろくの烏川村(当時)が生んだ天折(ようせつ)の日本画家・山口蒼輪先生や賈(がん)作論争で有名になった洋画家・滝川太郎先生もよくわが家に立ち寄られた。

私の父(高雄)は、俳号を晴陽といい、異色の女流俳人・鈴木しづ子を生んだ松村巨湫主宰の俳誌『樹海』の最高同人であった。わが家が『樹海』の前身『清淳集』の編集発行所や中信俳句作家クラブの事務所になっていたこともあって、東京から巨湫先生や長野から『科野』主宰の栗生純生先生、現在「りんどう」主宰の地元藤岡筑邨先生らの俳人や文化人が多く出入りしていた。そんなことから若山牧水夫人の若山喜志子先生もよく来られた。私のバイオリンを聴いてくださったときの白髪の高貴な姿が印象深い。

同じ町内の中町には彫刻家の太田南海、書道の眞野竹堂、民芸の丸山太郎の諸先生も住んでおられ、子供のころからいろいろ教えられた。中町からは駐西独大使を務めた吉野文六氏が出ており、わが家の二軒おいて隣のお兄さんが上智大学名誉教授(外交史)の三輪公忠氏であった。

## 五、バイオリンで厳しい練習

今日、スズキ・メソードとして全世界に広がる幼児音楽教育運動は、鈴木鎮一先生の松本音楽院が源流である。松本音楽院はやがて才能教育研究会となり、この三月末には天皇・皇后両陛下そして高田宮妃殿下ご臨席のもと、三〇〇〇人の子供たちから成る第五〇回ケランドコンサートを東京の武道館で開催した。

私は大会委員長だったので子どもたちと一緒に合奏したが、この八月中旬には台北でアジア大会があり、バイオリン持参での記念講演に招かれた。音楽通の曾文恵・前総統夫人が名誉会長だった。

当初の松本音楽院には、バイオリンのほか声楽(主任は副院長の森民樹先生)、ピアノ(主任は鈴木静子先生)があり、下横田町の粗末な木造二階建てを借りたものだった。しかし、その中身は大変なもので、すでに名声のあった豊田耕児さんがフランクのバイオリン・ソナタで鈴木先生のレッスンを受けていた光景などは、時代がまだ終戦直後だということを考えると、実にかけがえのない芸術活動であった。

その松本音楽院の鈴木鎮一クラスに母(綾子)に連れられて私が入ったのは、街角に雪が残る一九四七年(昭

和(二二年)一月であった。満十歳だったから、「どの子も育つ、育て方ひとつ」という対象年齢からはみだして、上達も遅かったが、「耕ちゃん」(豊田氏)のような天才が近くにいたので、音楽の道に進むことなどは、当初から考えなかった。

しかしバイオリンを習ったことは人生の大きな財産であり、今でもしばしば仲間と合奏したり、わが家でカルテットをしたり、東京外大の新キャンパス・オーブニング式典でブラームスの大学祝典序曲をコンサートマスターとして弾かせてもらったりと、多忙な日常を癒す最大の糧になっている。

先年満九歳で他界された鈴木先生はその意味で生涯の恩師であり、近くで接した先生の実生活や私個人への教育という点では、巨大な反面教師でもあった。

〔日本経済新聞〕二〇〇四年九月四日)

## 六、不渡りで世の裏表知る

わが家に突然起こった悲劇は、深志高校一年の時であった。中島薬局は市内で一、二を競う規模で繁盛していたのに、ある日、手形が不渡りになったといって、父は店を閉めてしまったのである。

「中島薬局がつぶれた」といううわさが広まるなか、それから親戚(せき)会議を開いたり、問屋や銀行が

出入りしたりの大混乱であった。親戚筋に金融業者がいて頼ったところ弱みに付け込まれてひどい目にあったり、親戚の紹介で事件屋風が力になってくれるというので頼んだら、金融業者と連携してわが家の財産を狙ったりといった具合であった。

そんな混乱のなか、気弱な父は寝込んでしまい、店員も四散するなど、母と長男で一人っ子の私しか周囲になくなってしまった。ご近所や遠い親戚、それに薬品問屋の社長さんなど、温かい手を差し伸べてくださる方もあったが、散々わが家でお世話したのに急に冷たくなった人たちもいて、世の中の表と裏を痛いほど知らされた。

中島薬局は大正製薬の信越総代理店だったので、なんとか支援してもらえないものかと、私自身が単身汽車で上京して出張員宅に一晚泊してもらい、翌日の本社の返事を期待したのだが、やはり無理だった。そのときの八王子郊外恩方村の夕日が忘れられない。

結局、一二月の文化の日の夜更けに父母と私の親子三人で、土蔵が二つもあった家屋敷をはじめ、私が北アルプス山ろくの集落、島々宿(しましましゅく)まで約二〇キロを寒風にさらされながら自転車や薬を売りに行ったアルバイト代で手に入れた電番や、父が集めた橋本明治画伯の掛け軸など、財産をすべて無くして裏木戸から生家を去ったのである。債権者会議では「どうか学校にだけは行かせてください」と私が頭を下げた。

なぜこんなことになったのか。中嶋家の家系には、獅子文六の小説『大番』に登場する兜町で切腹した大相場師・中嶋豊次郎という人物がいるが、父も株で大損をしたのである。

〔日本経済新聞〕二〇〇四年九月一日

## 七、高校で仏文化に親しむ

わが家の混乱が収まると、四ヵ月ぶりに復学したが、学業の遅れもあって、いささかショックであり、また同級生との再会がつかかった。

しかし、わが家が逆境に落ち込んだがゆえに、私の進路は理系から文系へと明確に転換し、社会の在り方に批判的な高校生になっていた。家の不幸がなければ、私は郷里で医師か薬剤師になっていたかもしれない。

近く創立一三〇周年を迎える松本深志高校は、旧制松本中学以来の自治を受け継ぎ、城山に近い丘の上にアカデミックなレンガ造りの校舎を誇っていた。

岡田甫校長は旧制広島高校の教師として体験した原爆の悲劇を、ヒューマニズムの見地から全校生に向かって淳々と語られた。二年次担任の小松孝志先生は後に長野県教育長にもなられたが、私が最も得意な科目で成績もトップであった世界史が専門であり、三年次担任の一般社会担当の平沢武男先生は、「真理は平凡なり」がモッ

トーで、気さくに生徒の悩みを聞いて下さった。

特に私が影響を受けたのは二年次から正課として始まったフランス語の並木康彦先生（後に中大教授）である。ベレー帽姿のダンディズムに加えて実に型破りの教師で、浅間温泉の下宿を訪れては徹夜で人生論を話し込んだ。東大仏文の渡辺一夫教授のまな弟子だったので、私たちは夏休みに渡辺先生からモーパッサンの短編「首飾り」の講読を受けるという特権にも預かった。

今は俳人としても著名な藤岡筑邨先生には古文を習ったが、映画評論にたけておられ、名画をよく鑑賞した。後に「邪馬台国論争」で一躍著名になった国語の古田武彦先生は、自説を述べて止まるところを知らない熱血漢であった。

深志高校では山岳部員でもあったが、フランス語とフランス文化を学ぶ「ゴローア協会」を私が中心で立ち上げ、深夜までキャンプファイヤーが尽きない秋のとんぼ祭（文化祭）には、冊子『シャンソン』を発行してランポーの詩や「自由を我らに」の歌を楽しんだ。

〔日本経済新聞〕二〇〇四年九月一日

## 八、珍しかった中国科志望

松本深志高校は県下随一の進学校であったが、生徒は秋のとんぼ祭が終わるまであまり受験を気にせず、浪人

もよい人生体験だといった気風が強かった。私も一浪組だが、予備校などとは全く無縁であった。

浪人生のときの思い出は、夏にフランス語仲間の山根二郎君と西村俊彦君を誘ってテントを担ぎ、まだほとんど人の入っていない北アルプス黒部源流の雲の平へ行ったことである。山根君は後に東大紛争の全共闘側の弁護士として勇名をはせるが、当時からけんか早く、折角三人で大縦走してきたのに、烏帽子岳の頂上でささいなことから私と大口論となり、二人して岩場から転落するところだった。

白状すると、この山行には私の秘め事が隠されていた。中学のときからある女性に恋したのだが、失恋なのかと思ひ込み、スタンダールの『恋愛論』を読み、彼女のために作曲したメヌエット入りのノートを必死になって書いて彼女に読んでもらった。その間、独りで西穂高岳に登っても傷心癒されず、再び親友を山に誘ったのである。そんな次第であったが、やはり受験が近づくと猛勉強を始めた。フランス語をいかして東大で仏文学をやろうかとも思ったが、戦後世界の変動に関心が向かい始め、特に周恩来とネルーとの平和五原則外交や中国革命の成功に鼓吹されていた私は、東京外語大志望に強く傾いていた。

願書を書くときに中国科かインド科か迷い、結局中国科に決めたのを覚えている。松本の私の周辺では「嶺ちゃ

んは中共にかぶれた」とのうわさも立つほど当時はまだ珍しい進路選択であった。

入試ではフランス語が最高点だったらしく、「なぜ中国科に行ってしまったのか」とフランス科主任の鈴木健郎教授が入学直後に呼び出してくださった。入試に面接があり、志望理由を問われたので「外語大には串田孫一先生がいるからです」と躊躇（ちゅうちょ）なく答えた。名著『若き日の山』は当時の私のバイブルであった。

（『日本経済新聞』二〇〇四年九月二五日）

## 九、あこがれの山岳部入部

東京外国語大学の中国語専攻は当時正式には第六部第一類といった。通称も中国語学科ではなく中国科が正しいのだが、その背景には語学中心か中国研究も含むのかという外国語大学に固有の問題があったといえよう。

しかし、当時の中国科は暗記と毎時間テストによる特訓方式の長谷川寛先生と、日本の中国語学界の代表的存在で後に学長になられた鐘ヶ江信光先生というお二人の助教授の授業など、すべて語学中心であり、期待していたような中国革命なり「毛沢東思想」に言及されることはまったくなかった。

そこで私は卒業論文を、わが国で最初に「地域研究」を唱導されたお一人の河部利夫教授の世界史ゼミで書い

た。題目は「階級の論理とナショナルリズム」であった。あこがれの串田孫一先生は倫理学担当で、山岳部長だったので、私も山岳部に入学した。食堂脇の小屋が部室で、串田先生もよく来られたが、『若き日の山』を耽読（たんどく）したことを近くで告白する機会は、在学中はついになかった。

当時の外語山岳部は、大谷一良氏（版画家）や三宅修氏（山岳写真家）らの上級生が、串田先生中心の山の芸術誌「アルプ」にかかわったり、モンゴルに海外遠征したりと、たいそう盛んであったが、やがて私は学友会（自治会）の委員長に選ばれ、学生運動に時間を割くことになったためあって、本格的な登山は、新入生の夏の北アルプス奥又白谷をベースにした前穂北尾根での訓練が主なものであった。

一年生で砂川基地反対闘争に二年生で原水爆禁止運動に参加した私は、三年生のときの勤務評定反対闘争のリーダーであった。三日間のストライキを提起して教授会で退学処分前だったが、当時の教務補導部長が英語で有名な小川芳男先生で、私にとっては運命的な出会いとなった。

外語名物の語劇と一緒の文化祭が中野公会堂で催され、私がバイオリンを独奏したときには、「勤評反対」とやじが飛んだ。

（『日本経済新聞』二〇〇四年一〇月二日）

## 一〇、安保闘争の真ただ中に

一九五八年の勤務評定反対闘争は、警職法反対闘争と連動して高揚していった。なかでも和歌山での反対運動が全国的な決戦場になり、当時、東大の西部邁君（現在、評論家）らとともに都学連の執行委員にもなっていた私は、全学連オルグとして和歌山へ行くことになった。その日がたまたまアマチュアの都民交響楽団の日比谷公会堂での公演だったので、演奏会用の黒いスーツを東京駅で着替えて夜行列車に乗った。

学生運動の高揚は、翌五九年秋から日米安保条約改定反対運動へと発展していく。そのころの全学連は東大の森田実（現在、政治評論家）・香山健一（後に学習院大学教授）両氏らの主導下で、既成の左翼、特に日本共産党と対立するラジカルな政治姿勢を示しつつ、六〇年安保闘争の主役になっていった。

東京外大では委員長の私が、その語学力で全学連国際部長になっていた一級上のロシア科の志水速雄君（後に東大教授）や一級下のドイツ科の沢井信治君（現在、映画監督）らと「社会学同」支部を立ち上げたところから、安保闘争の渦中に入っていた。六〇年四月二六日、国会周辺のチャペルセンター前でデモ隊が警官隊と対峙（たいじ）していたとき、明大の小島弘君（現在、世界平和研究所参与）が「今日、志水がばくられるのでよろ



しく」と私にささやいた。と見る間に志水君は装甲車を乗り越えて警官隊と衝突、公務執行妨害で逮捕された。

以後、「安保反対、岸を倒せ！」のスローガンの下に連日国会周辺を数十万のデモが取り巻き、宿命的な六月一五日を迎えたのである。戦後の日本がなんとなく大きな岐路に立っていたと感じられた危機意識が大衆的に噴出したのであり、具体的に日米安保条約の条文を読んで、日本の安全保障の先行きを危惧(ぐ)したわけではなかった。その点では、あれほどの反対にもかかわらず安保改定をやり遂げた岸信介首相は、見事であった。

〔日本経済新聞〕二〇〇四年一〇月九日)

#### 一、就職先で語学力磨く

安保闘争への高まりの中で、気がつくとい私は大学卒業の年になっていた。迷った末に、秋のある朝、予告もせずに小石川の小椋広勝先生のお宅をお尋ねした。小椋氏は財団法人、世界経済研究所の理事長を務める経済学者で、外語祭の講師にお招きした方だった。小さなお宅は玄關まで本だらけで、是非世界経済研究所に入りたいとお願ひすると、「生活の保証はできないが、それでもよければ。ただし試験をする」とのことであった。

当時私が住んでいた新大塚のアパートに近い同研究所で、英語とフランス語の試験と、岡倉古志郎氏(国際政

治)、陸井三郎氏(アメリカ研究)による面接を受けた。

翌日、岡倉先生からはがきが来て採用が決まったが、給料は大学卒初任給の約五分の一の三千円だった。中国研究は姉妹機関の中国研究所がやることで、欧州共同市場を中心に英語やフランス語の新聞・雑誌を読んで訳すことが仕事だったが、先輩の野村昭夫所員(後に東京経済大学教授)から赤字をいっぱい入れて懇切に直されたことが、私の語学力をどんなに高めてくれたことか。

こうして一応就職が決まり、就職免許もないのに週一日は杉並区の高千穂高校で英語の非常勤講師もすることになった私は、和歌山の勤評闘争の間に出会った奈良女子大理学部三回生で当時は自治会副委員長だった女性(小林洋子)が東京の中学校教諭に決まったこともあって、岡倉先生ご夫妻に仲人をお願いして学士会館で会費制の結婚式をした。

一九六〇年代初頭、中ソ論争が大問題になるにつれ、私は中国も分析するようになり、『エコノミスト』などの雑誌にも寄稿するようになった。そんなある日、所員会議の席上、T氏が興奮して「研究所にアメリカ帝国主義の手先がいる！」と言いつ出した。私はもともと「トロツキスト的傾向がある」として日本共産党に入党を拒否されていたので直接関係なかったが、日共内部の修正主義者狩りがあるに研究所を襲ったのである。

〔日本経済新聞社〕二〇〇四年一〇月一六日)

## 一二、清水先生との出会い

世界経済研究所は、四半期毎の『世界経済年報』を刊行したりして、苦しい経営ながらも二、三の所員が研究に専念していた。そこに「現代修正主義」が発生したというのだが、離党をよぎなくされた共産党幹部・春日庄次郎氏の影響を一部所員が受けていたことは事実である。

所員の間でも先輩絡の千葉秀雄氏（後に芝浦工大教授）は、春日氏とは戦時中の検挙で共に宮城刑務所にいた時からの親友で、千葉氏が市民派の主婦などを誘って組織した「ラッセル平和財団支持者協議会」の勉強会が私のアパートで行われた際には、春日氏も来られたことがあった。

なお、私の記憶違いでなければ、「ベ平連」つまり「ベトナムに平和をー市民連合」という呼称は、右の協議会の提案によるものであった。

そのころの私の活動としては、現代思想研究会のことが忘れられない。学生運動はその後いわゆるセクト化に墮して行ったが、安保闘争を完全な敗北ととらえた私たちは、「今こそ国会へ」（『世界』一九六〇年五月号）の文章とともに六〇年安保闘争の知的リーダーであった清水幾太郎氏（学習院大学教授）を中心に、同年初、現代思想研究会を結成した。

翌春には月刊誌『現代思想』を現代思潮社から刊行することとなり、私は編集委員になった。編集を担当したことから、当初会に参加した評論家の村上一郎氏や会外の論客・佐藤昇氏、山田宗睦氏らにも会うことができた。多くの話題を呼んだ現代思想研究会ではあったが、雑誌は黒字だったのに第七号で終刊とした。そこには「再出発にあたってーわれわれの視点」と題して高根正昭（後に上智大教授）、三浦つとむ（哲学者）の諸氏らと私の六人が書いている。

清水先生とは、国会前の路上で香山健一氏から紹介されたのが最初であったが、仲間と荻窪のお宅に伺ってはよく議論をした。結局私が先生の最晩年まで親しくさせていただいたのだが、第一級の知識人の鞞（つよ）さと孤独を間近に見たような気がする。

（『日本経済新聞』二〇〇四年一〇月三三日）

## 一三、自由に学んだ大学院時代

世界経済研究所は一九六三年からアジア・アフリカ研究所に変わったが、内紛のおおきくもあり、私は将来性に疑問と不安を感じていた。六〇年安保を闘った学生運動の仲間は、新しい出発を期して大学院に入ったり米国へ留学生したりし始めていた。

私は国際関係論という学際的な新しい学問に強い関心

があったので、それなりの準備をして友人と一緒に東大大学院社会学研究科国際関係論課程を受験した。受験者の専攻から隔たった地域の問題が出るとの慣例で、インドネシア現代史が出題され、中国語も現代文だけでなく、古い文章も出たが、研究所にいたかいてもあって、幸運にも合格した。本郷の法文経大教室が満席になるほど受験者が多かったのに、合格者は定員の半分の六人のみだった。

指導教官には帝国主義論で著名な江口朴郎教授をお願いしたくて参上すると、私が中国研究なので逡巡（しゅんじゅん）されていたが、「まあ、いいでしょう」と引き受けてくださった。

当時、国際関係論課程には、気鋭の中国政治史学者・衛藤藩吉助教がおられ、衛藤先生は後に「中嶋君は僕の授業を拒否しまして……」とよく言われたが、アカデミズムに疎かった私には、江口先生しか念頭になく、また衛藤先生の授業が土曜日だったので、週末は私が生活のために開いていた「霞ヶ丘バイオリン教室」のレッスン日に当たっていたからでもあった。なお、その時の私の生徒の一人が、異色の社会学者として現在活躍中の宮台真司君である。

国際関係論課程の本拠は駒場だったが、本郷の授業では、斉藤真教授のアメリカ外交史が中国研究の上でも大変有益であり、京極純一教授にはバーナード・クリック

の難しい英文テキストで政治学の真髄を学んだ。授業のたびに小室直樹氏（現在、評論家）が京極先生に食いついていた。

駒場では、兄貴分のような国際関係史の斉藤孝講師に助言を受け、そして国際政治史の江口ゼミの自由な学問的雰囲気からは、実に多くを学んだ。

（『日本経済新聞』二〇〇四年一〇月三〇日）

#### 一四、中国共産党研究に没頭

東大大学院に入学する前後から、熾（し）烈化したソ連と中国のイデオロギー論争が中ソ対立へと発展していき、私は「エコノミスト」や「思想」に、中ソ論争や現代マルクス主義を巡る論文を書き始めていた。

それらの論文に注目してくれた青木書店の編集者が企画を通してくれ、現代中国を分析する著書を執筆する機会を与えられた。大学院に入ったとはいえ、自分の将来がどうなるのかも定かでない不安の中で、毎晩本郷の東大図書館に残って、一年間苦闘して書き下ろした六五〇枚の原稿が、一九六四年一月に『現代中国論—イデオロギーと政治の内的考察』と題して出版された。満一八歳の時であった。

そのころまでに『毛沢東選集』などは隅から隅まで読んであったので、神田の古本屋・篠村書店で埃（ほこり）

まみれになっていた戦前のソ連共産党の哲学教科書を見  
つけ、毛沢東の「実践論」「矛盾論」の種本であること  
を裏証することができ、また私自身が鼓舞された革命中  
国の内実が、人民公社、「大躍進」政策など、多くの問  
題だらけであることを分析した。

今考えると、グラムシやトリアッティらイタリア・マ  
ルクス主義の影響も残っているけれど、「毛沢東思想」  
や中国社会主義を批判することはタブーだったのに、若  
き日の私の最初の著作ということもあり、多くの書評で  
好意的に取り上げられた。半面、中国共産党べったりだっ  
た日本共産党系のメディアからはひどく攻撃され、広告  
も拒否された。しかし本書は以後、増補版も含めて三〇  
年以上にわたり一八版を重ねている。

大学院の修士論文は、『現代中国論』の第二部を書き  
直して、「転換期中国の政治過程」と題し締め切り時間  
寸前に提出したが、無事にパスして博士課程に進んだ。  
大学院仲間でも合評会があり、全員に批判されたが、遅  
れて来られた指導教官の江口朴郎教授が「まあ、諸君も  
中嶋君のように本を書くんですなあ」と最後にぼつり  
と言われた言葉が忘れられない。

〔『日本経済新聞』二〇〇四年一月六日〕

## 一五、「文革の真相」を雑誌に

一九六六年八月、「造反有理」を叫んで北京の天安門  
広場を埋め尽くした紅衛兵の出現に世界は驚嘆した。  
「プロレタリア文化大革命」が開幕したのである。

文化大革命を「人間の魂にふれる革命」だとたえら  
風潮が強かっただけに、私は自分の目で確かめてみたか  
つた。

たまたま孫文生誕一〇〇周年記念大会代表団の一員と  
して訪中する機会を得たのだが、当時は国家公務員の共  
産圏渡航が禁じられていて、国立大学教員になったばか  
りの私には、文部省からの許可が下りなかった。人事院  
総裁に直訴したりして単身香港経由で紅紅烈烈たる文革  
渦中に飛び込んで行き、一月一二日の人民大会堂での  
記念大会に間に合ったのである。

大会の主役は周恩来総理であったが、劉少奇国家主席  
と鄧小平総書記の姿が見えない。と訝（いぶか）ってい  
ると、この二人が舞台の右手から遅れて登壇したが、フ  
ラッシュの放列も拍手もなかった。その瞬間に私は「こ  
れが文化大革命だ」と実感した。周恩来は『毛主席語録』  
をかざして「毛主席万歳、万々歳！」を絶叫し、私が抱  
いてきた周恩来像は眼前で崩れていった。

こうした体験を経て上海に着くと、外滩（ワイタン）  
の平和飯店の壁には激しい武闘を伝える壁新聞が出てい

た。紅衛兵糾察隊に追われながら路上で拾ったガリ版刷りの小字報には「劉少奇が第一の実権派であり、第二が鄧小平である」と書かれていた。文化大革命を権力闘争の大衆運動化と見る私の視点は、こうして固まったのである。

次いで香港に滞在中、党内で孤立した毛沢東が北京を脱出して江青夫人らと上海から文革ののろしをあげたとの情報を入手した。私は当時、読売新聞機動特派員を依頼されていたので、大きな記事を書いたのだが、内容があまりにも衝撃的だとして印刷寸前にストップがかかった。そこで『中央公論』編集次長の柏谷一希氏が「毛沢東北京脱出の真相」と題して私の論文を掲載し、内外に多くの反響を呼んだ。台湾の李登輝前総統もその読者だったという。

（『日本経済新聞』二〇〇四年一月一三日）

## 一六、学園紛争で学生と対決

一九六五年秋、東京外国語大学の伊東光晴先生（経済学）から、私を歴史学（世界史）の教員に採用する話が進んでいるので、中国科の私の恩師・鍾ヶ江信光教授に会ってほしいとの思いがけない電話を頂いた。二度とこの大学の門はくぐるまいと思っただけなのに、こうして卒業七年目で母校に迎えられた。学生時代に学友

会委員長としての私の相手方だった小川芳男先生（英語教授法）が学長になっていて、異例の推薦の言葉を教授会で述べられたという。

教師としての私は、自分の学生体験に照らし、ゼミナール活動には力を尽くした。やがて私が担当の国際関係論講座が新設されたが、『歴史と未来』と題する中嶋ゼミの雑誌は、学外の識者の寄稿も頂いて現在までに通巻二六号を数えている。約二五〇人のゼミ生が広く国内外の第一線で活躍してくれていることが本当にうれしい。

ところで私が教壇に立って間もなく起こった学園紛争の嵐は、東京外大をも直撃し、東大、東京教育大と並ぶ「最重症三大学」になった。外大は中野区にあった日新学寮の管理運営問題が全共闘学生の格好の攻撃材料となり、六八年一月には大衆団交、というよりは教官の吊るし上げが、報道陣を閉め出した密室の講堂で延々三日間にわたって行われた。

東大大紛争が注目されたもうひとつの理由は、全共闘を支持するいわゆる造反教官が多かったことだった。文学の安東次男教授は教授会による辞職勧告を受けたが、ロシア文学の原卓也助教授（後に学長）、仏文学の岩崎力助教授らのことがマスコミでよく報じられた。

一方、まだ講師だというのに教授会代表委員に選ばれた私は、紛争の渦中に立って学生側と対決し、坂田道太文相との交渉にも臨んで東大、東教大が中止した入試を

断行した。半年近いバリケード封鎖が機動隊によって解除されたとき、私の研究室は水や油や火で徹底的に荒らされていたが、学園紛争とその人間模様は、一つの忘れがたい道程であった。

『日本経済新聞』二〇〇四年一月二〇日)

## 一七、初の訪米、文化に圧倒

若き日にその渦中で体験した文化大革命と学園紛争は、私自身の思想的な転換を大きく促してくれた。加えて一九六七年春の初の米国旅行がある。激動の中国から帰国後、国際文化会館の松本重治先生から、日米知識人会議がウィリアムズバーグであるので文化大革命について報告するようにとのお電話を頂いた。旅費はファーストクラス分だからそれで妻も同様にはとのこと。

日本側は笠信太郎、桑原武夫、貝塚茂樹、加藤周一、坂本義和の各氏ら、米側はE・ライシャワー、D・リースマン、ダニエル・ベル、S・ホフマン、R・スカラビーノの各氏らそうそうたる顔ぶれで、最年少の私たちは新婚旅行のようだと言われた。

ベトナム戦争と文化大革命がテーマのこの会議以来、『平和の代償』の永井陽之助教授(東京工大)の知遇を得ることとなったが、会議後に米国各地を訪れて見たアメリカ文化に圧倒された。

学園紛争収拾後に私は外務省特別研究員として香港に留学した。一九七〇年にはモスクワの国際歴史学会で初めて英語で報告。「中国のトロツキー」彭述之夫妻をパリの亡命先に訪ね、実娘の程映湘さんとその夫クロード・カダール氏(ともに中国学者)とは生涯の友になった。そのころには私はマルクス主義からは遠い地点に立って、創刊間もない雑誌『諸君』に連載した「私の香港通信」では、七〇年三月の時点で米中接近を予測することもできた。亡父が抱えた負債も香港から送金して完済し、二男二女の子どもにも恵まれた。

つい先ごろ、私が部会長を務める中央教育審議会大学院部会で、経済学者の青木昌彦氏(スタンフォード大学名誉教授)から米国の高等教育に関する優れた報告を受けた。私の隣席の彼は、六〇年安保の時期に、現代革命運動の理論家として颯爽(さっそう)と登場した紅顔の東大生・姫岡玲司(筆名)君にほかならない。あれからもう半世紀に近い歳月が流れている。

『日本経済新聞』二〇〇四年一月二七日)

本稿は、『日本経済新聞』紙上に、二〇〇四年八月七日〜二〇〇四年一月二七日にわたって掲載された。なお、転載にあたり、一部の表記を改めた。

## 編集後記

★予定よりやや遅れましたが、中嶋ゼミの会のゼミ誌『歴史と未来』第二十七号が完成し、会員の皆様にお届けすることができ、ホッとさせていただきます。中嶋嶺雄先生退官記念号と銘打った第二十六号の刊行から四年近く。少しばかり長いこの間隔は、先生のご研究・教育の場が東京から秋田に移るなど、ゼミの会を取り巻く環境にも大きな変化があったことを思えば、やむを得なかったことと考えます。

しかし、中嶋先生も交えて二〇〇五年初夏に今号の発行をゼミの会幹事会で決定して以降は、特集「民主主義のコスト」への寄稿をお願いした会員諸氏から力作が続々と編集委員会の元に届き、『歴史と未来』発行継続への熱い思いを感じる事ができました。特集に限らず、執筆依頼を快諾してくださり、多忙な中、玉稿を寄せて頂いたゼミの会会員の皆様にも心からお礼申し上げます。

編集作業の過程では、会員からの激励の言葉とともに、かつてはゼミの会幹事会の運営や

『歴史と未来』編集の中核を担った学生が不在という新たな環境変化を受けて、「今後のゼミの会の活動をどのように進めていくか議論も必要ではないか」といった貴重な意見も伺いました。前号の編集長を務められた勝又美智雄先輩（現・国際教養大教授）がその編集後記で記されているように、「ひとつの時代を終えて、次にどんな時代をつくっていくか」、中嶋ゼミに集った筆者、読者の皆さんと共に考えていきたいものです。（伊藤）

★『歴史と未来』第二十七号の編集メンバーの一人としてひとこと。皇居の緑を望む東京會館（東京・丸の内）の会員制「ユニオン・クラブ」の一室で、中嶋学長を囲んでゼミ仲間が「歴史と未来」刊行に向けた構想を練り上げたのが一年半あまり前。基本テーマは「民主主義のコスト」という中嶋学長の提案は、参加者全員にすんなり受け入れられた。次なる計画はそれぞれ分野で活躍するOBへの原稿依頼の割り振りなど。それから一年あまりの後、伊藤努・編集長（時事通信）と秋田から駆けつけた山崎直也・副編集長（国際教養大）と小生の三人が、東京・

東銀座にある時事通信本社ビルに集まり、原稿の直し・点検のための編集会議を一回開催した。あとはEメールの交換だけで編集作業は爾々と進められた。

I-T時代の雑誌作りは、前世紀のそれと比べ、格段に進化した。秋田にいががカイロ、香港だろうが、ほとんど地理的な遠隔性に関係がない。世界はグローバル化し、各国ではナショナルリズムが台頭している。中嶋学長とゼミOBが世に送り出す『歴史と未来』第二十七号にそんな二一世紀の縮図を見出すことができるはず。伝統ある中嶋ゼミの志が次号にも受け継がれることを祈念したい。（濱本）

★前号に引き続き編集に参加させていただきました。若干遅くなりましたが、無事刊行にこぎつけて安心しております。

原稿をお寄せいただいた執筆者の皆様、広告をご出稿くださったビジネス社、扶桑社、文藝春秋社（五〇音順）の担当者の皆様、田端印刷の佐藤麻衣子様に、あらためて御礼を申し上げます。（山崎）

『歴史と未来』第27号 特別頒布価格¥800

---

発行日 2006年12月28日  
編集発行人 伊藤 努  
発行所 中嶋ゼミの会  
秋田県秋田市雄和椿川字奥椿岱193-2  
国際教養大学 山崎直也研究室気付  
TEL：018-886-5882  
E-mail：zeminokai@aiu.ac.jp  
印刷所 田端印刷株式会社  
宮城県仙台市宮城野区日の出町2-5-14  
TEL：022-284-1505

---